

〈権力を持たない者は表現することができる〉

6

自主講座について一私は自主講座というのは有名な人を呼んで話しを聞くことではないと思う。どのような教授に対してでも、「あなたの研究はこの社会とどういう関連を持っているのですか？」と問うことが自主講座の出発点でなければいけない。それは、学問内容を変革していく闘争の出発点でもある。そして封鎖によって研究が妨害されているという研究者に対しては「封鎖によって妨害されるような研究とはなんなのか？」と逆に問い返すことだ。

7

私の〈情況への発言〉(別掲)には、カッコが多く使っている。このような書き方をしたのは、私が、コトバを確定性として使うことに反発しているからである。一つ一つの言葉は変革されねばならないのである。たとえば、「革命」とか「大学」という言葉は死なせねばならない。言葉を死なせるということは現実を死なせるということであり、そのためには自己の全存在を賭けねばならないのである。

私が、民主制について疑問を持つのは、現在の民主制は、自己を賭けない擬制となっているからである。私の〈発言〉に対して、私に対して「あなたはたった一人で神大を混乱させるつもりか」といった非難が浴びせられる。だが、私は、そのような数量的発想をこそ破壊せねばならないと思う。自己の存在を賭けていない多数決ほど危険なものはない。総ての人が自己批判の上に、自己の存在を賭けねばならないと思う。

8

だから、私が、今、話したことをそのまま信ずるのではなしに、諸君の原理を築いて欲しい。そして表現の変革と体制の変革の無限の可能性を闘いの中で生かして欲しいと思う。

■シンポジウム

——大学人・知識人のあり方が、この大学闘争の中で、問われていると思うが、それについて、先生はどう思うか？

松下 あるスターリニストは「60年安保は知識人であるが故に声明を出すことで闘争ができた。ところが、最近では“声明”を出す権利もなくなってしまった」ということを言っている。つまり、60年安保においては、知識人とか大学とかは疑われることがなかったのだが、最近の大学闘争は、その神話を崩壊させつつある。いわば総ての問題の拠点が崩壊しつつあるのである。もはや、知識人として、大学人として発言することが意味をなさない。十・八の羽田アピールには、何人かの有名な人が発言をしているが、私はそういう固有名詞がなんらかの意味をもつことには反対である。問題は、有名であることとそれを温存する体制をこそ粉砕することであると思う。そういった体制の上に、あぐらをかいていた大学人を今の大学闘争は告発していると思う。

——僕たち学生はこのまま社会に出れば、ベルト・コンベアに乗せられて、中級労働者として資本の手先として使われてしまうものとしてある。そのような自己を否定する闘争としてこのストライキはあると思うのですが。

松下 評議員と自己との闘争の中に、総ての階級闘争がはらまれていると思っています。つまり、最も身近な人との闘争の中に、最も深刻な闘争が含まれていることを理解しなければならないということです。パリ・コンミュンを含めて、総ての闘争が、夫婦喧嘩の中にも存在しているということです。

——今、いわれた将来の日常性の否定ですが、僕は、今の僕の日常性を否定しなければいけないと思っています。

松下 世界のどこかで悲劇があることは、自己が日常性にひたりきっていることの裏がえしだと思います。国家とは、われわれが、日常性につかっているかぎり、みかけは安全に運転されている体系です。しかし、それが、どういうものかは、ベトナムを例に引くまでのこともないと思います。

僕は、教官として、管理者としての日常性を否定しました。ですから、当然、試験もしないことにしています。ですが、試験をしないと、200人の人が卒業できないことになるわけで、「泣いて」頼みにくる人もいるわけです。そこで、恨んでいる人もいるでしょうが、恨む人を恨まなくするようになろうと思っています。

僕のやったことは、現在の秩序を逆用することだと思います。が、たとえ、君らが大学を出て就職して、労働組合対策に回されたとしても、秩序を逆用し、日常性の論理を否定して闘うことはできると思います。

——それでは、科学者としての自分と、そういう階級社会に存在していることとはどう重なるのですか。

松下 僕は、どんな言葉でも、存在でもよい、それを疑いそれと生涯、格闘することが科学することだと思っていますが、そのことが、先ほどいった「あなたの研究が、この社会とどう関係するのか」という問題、つまり、社会的自己に答えられるものでなければいけないと思っています。この二つの統一として真に学問はあるのじゃないかということです。

新聞は私のことをも含めて「神戸大の学生は、うまく、教授を利用しながらスト体制の強化をはかっている」と書いているが、私は、学生諸君に利用されているのでも、学生を啓蒙しようとしているのでも、連帯しているのでもない。私は、私にとって一番、欺瞞と思えることと、研究者として闘ってきたし、闘いを永続的なストライキとして闘い、今までの大学、学問の欺瞞性と闘うことを決意したから、自分の全存在をかけて、一人でも、ストライキをしているのである。だから、私は、学生大会とか、代議員大会で連帯のあいさつを送るようなことはしないで、こういったシンポジウムでみんなと話し合っているわけです。

——最近の闘争は、機動隊との激突をはじめ、闘争における生命の問題を提起しているが、それについては、どう思いますか。

松下 「ヤツは敵だ、敵を殺せ」というのが政治の発想だったが、そういう発想はダメで、悪いのはシステムであるというのは認識されてきていると思う。僕は、人を殺すというのは自分の死が、その対極になればならないと思っています。焼身自殺をできるだけの根拠をもたねばならない。自分がいつでも死ぬるというまでに、自己の思想を深化させることだと思っています。つまり、表現の変革が、物的変革と平行に進行しなければならないわけです。そうではなくて「憎き機動隊をやっちまえ！」式の物的思想は粉碎しなければならないし、そういった意識の変革が物理力を強めるのだと思っています。

——総てのことばを確定させてはいけないというのですか。

松下 『試行』に三年前から連載していることとも関連しますが、私が「六甲」というとき、それは固有名詞の六甲を越えて、幻想的な「六甲」を意味しているわけです。安保のとき、東京に居たのですが、そこは、私は100米四方しか見ることが出来ませんでした。汚れつくされた空間——それが現代の都市です。それが、この六甲に来たとき、私は、見つめられていない「空間」と「傾斜」を知りました。その「傾斜」をあたりを見ながら歩くと、自分が意識していない空間がみえるわけです。

そういった風景の展開を意識の展開に置きかえたときどうなるかということです。そうすれば、「革命」とか「スターリン主義」とかという言葉が変ってくるわけで、それを方法化したいということです。

私が、東京の人間を信用しないのはこのためです。

——あのアピールでは、具体的にいうと〈 〉はどういうような意味で使っているのですか。

松下 〈私〉は、この私ではなしに総ての私という普遍的なものを規定しています。〈ストライキ〉は、みかけだけのストではない、根源的なストライキです。

〈すくなくとも〉はとり引き的発想を否定し、永続革命の発想を表わそうとしたわけです。

ついでにいうと、世界的にみても、激動のあるところは記号を多く使っています。チェコ、西独、それからヒッピーの文章などはそうです。ところが、中国の文革ではこれが少ない。私が、中国の文革をあまり信用してない一つは、このためもあります。中国の革命は、毛沢東をも粉碎するものでなければいけないのではないかと思います。

私は、言葉を疑うというのは、存在を疑うことと同じことだと思っているわけです。